

対談

多様な要素が醸す地域の魅力

産業としての裾野が広く、地域経済に大きな影響力を持つ観光。

地域のポテンシャルを引き出すことで疲弊しない観光を根付かせることができる。

実は「発酵」が共通項というお二人に観光を基点に味わいを増す地域のポイントを聞いた。

聞き手：地球環境パートナーシッププラザ 星野智子

編集・採録：つな環編集部 撮影：岡本 淑

文教大学国際学部教授
海津 ゆりえ氏
Kaizu Yurie

発酵デザイナー
小倉 ヒラク氏
Ogura Hiraku

地域の気候風土を詰め込んだ 発酵文化

星野：お二人の共通点は発酵と伺いました。

小倉：地方を旅していて気持ちがいいなと思う場所には醸造蔵があるのです。それは菌にとっていい環境である水と空気の流れを選んでいることと関係しています。また、菌を安定させるためにも蔵を移動させることなく歴史を重ねています。その土地の気候や文化を現すのが醸造文化です。

海津：醸造とは食品を保存して長くもたせる知恵です。それは人が長く住み続けて来た証でもあり、気候風土が厳しくても発酵文化を発展している土地は、私たちにとっても居心地がいいですね。観光資源につながる魅力の一つです。

旅がもたらすもの

星野：地域の魅力を訪ね歩くことが観光ですね。国連が2017年を「開発のための持続可能な観光の国際年」と定めるほど観光が脚光を浴びているのはなぜでしょうか。

海津：世界的にみても、あらゆる産業のなかで観光だけは右肩上がりの傾向が続いているからです。旅は旅人のものですが、地域からみると観光の影響は大きいのです。

旅が一般の人に広がった第二次世界大戦以降の歴史のなかで観光産業の規模が大きくなると、次第に地域に残される影響も見過ごせなくなります。開発や動植物の乱獲、オーバーユース、伝統や文化の変容などの観光による弊害の克服が1960年代から議論されるようになりました。国連世界観光機関（UNWTO）の前身である世界観光機関（WTO）や国連環境計画（UNEP）等を中心に、観光は地域の自然や文化にマイナスの影響を与えるものであってはいけないとして倫理規範が設けられました。92年の地球サミット（環

境と開発に関する国際連合会議）で「持続可能な開発」がテーマとなり、観光も持続可能性という言葉とつながってきました。観光することの楽しみも観光地の自然・文化も損なうことなく次の世代に継承されなければならない。その認識を世界共通のものにしようと、国連は2002年を国際エコツーリズム年としました。

2015年にSDGsが発表されましたが、観光産業は裾野が広く、突き詰めるとSDGsの17ゴールほとんどに関連するのではないかと。観光に関わる課題を解決することがSDGsの達成に貢献するのではないかと、ということから2017年は「開発のための持続可能な観光国際年」と定められたわけです。

星野：小倉さんが国内外を旅するなかで、旅や人との出会いから感じていることはなんですか。

小倉：私にとって旅とは多様性を知ることです。ローカリティがはぎとられたニュータウンで生まれ育ちましたが、高校3年の時にタイを旅したときに、初めて生々しい地域性やその地域で生きていく中でのクオリティ・オブ・ライフ（以下、QOL）に触れることになりました。それで自分が生きてきた世界が狭かったことに気づいて、夜の路地裏で「本当にあぶない」、素敵な宿に泊まって「本当に気持ちいい」ということへの自分の感覚の広さ、可能性を知りました。20代になって大学の文化人類学の研究や旅を通じてヨーロッパ文化の複雑な蓄積や思考も知りました。帰国してからアートディレクターを経て、地域づくりやローカルデザインを手がけるなかで日本の地方を訪れるようになり、日本国内のQOLを知ることになります。例えば僕は神社にいくと、どんな神様がいるのか、神様はまちのどこに息づいているかが気になるんですが、これは旅をするなかで培った感覚です。旅によって世界を見る目が鍛えられました。

地域みんなの宝でもてなす

星野：観光という大きな産業によって地域にいろいろ

用語解説

**国連世界観光機関（UNWTO）
世界観光機関（WTO）**
1975年に設立された観光を通じた豊かな社会の実現と各国の相互理解の促進を理念とし、責任ある持続可能な観光の促進を目

的とした国際連合の専門機関。2005年から名称に国連（UN）を冠し、157の加盟国および6の地域、480以上の賛助加盟員で構成されている。

国際エコツーリズム年
エコツーリズムの重要性を世界的にも認識することを目的に、国連が定めた国際年のひとつ。2002年にカナダのケベックで行われたワールド・エコツーリス

ム・サミットでエコツーリズムを定義したケベック宣言が採択された。



な影響があると思います。そのなかでエコツーリズム、サステナブル・ツーリズムという考えのもとにさまざまに工夫されていますね。

小倉：都市部のホテルでは部屋のデザインや料理の見せ方を工夫するのに対し、農山村部だと川沿いにテントを立てて泊まったり、魚を釣って星空の下でBBQをしたり、そこにある自然を活用できます。都市部からのリターン者だけではなく、そこで生まれ育った人の中でも、都会にはない自分たちの持つ魅力的なリソースで観光や新しい産業をつくっていけるとわかっています。

海津：私もエコツーリズムを研究するなかで、地域の外から観光産業を持ち込んだことによって地域の大切なモノ・コトを壊してしまう例を見てきました。そうではなく、地域の人自身が主体となって訪れてくれる人を増やしていく、交流することで地域の文化を知ってもらうことが重要だと思います。「宝さがし」と呼んでいます。地域の人自身が大事な宝を発見し、その宝を旅の中心に据えることが、結果的に、地域のサステナビリティにつながっていくのではないのでしょうか。

星野：観光産業を経営活動だけでなく、持続していく地域づくりに活用する考え方はどう培われるでしょう。

海津：80年代から90年代、バブル時代の観光産業が象徴的でした。成功した人たちはあの頃のやり方に戻

りたがりますが、時代は繰り返しません。

小倉：かつて繁盛した温泉郷の中には、持続が不可能になってしまった観光地もあります。山間地の宿や飲食店での刺身盛り合わせに代表される地元の食材を活かしていない食事が出てくるような、地域の産業を盛り立てない観光モデルです。それだと地域の良さを味わえませんし、観光と地域が繋がらないと内需を生みません。観光が栄えることで地域の多様な経済活動が有機的につながり、はじめて持続可能になります。

持続可能な観光におけるキーワードは「ローカルであること」「QOL」の二つだと思います。地域の風景や気候を活かした宿、地域の人に開かれた宿があり、そこで採れたものを地域の人と調理して提供する。観光の要素は少ないけれど、一つひとつがきちんとしている。旅慣れた人はQOLを大事にしている地域もそれに応えはじめていると思います。

海津：そのニーズに応じている地域とできていない地域がありますね。大型観光地には難しさがあるようですが、今の潮流を読んで変えて欲しいですね。

小倉：過去に成功モデルを持っているとイノベーションが起きづらいといわれますが、大型観光地は団体客モデルのビジネスモデルを手放せないのでしょうか。

海津：観光地として栄えた地域にはもともと、魅力的な資源があるのです。これまでは人が多く集まることに焦点を当て過ぎていたのですが、地域の根っこにある資源を訪れてもらうというスタンスに戻せば良いと思いますし、それでエコツーリズムにシフトしている地域もあります。人々を受け入れるインフラは既に整っているのです。新たな開発は不要なのです。

小倉：新しいローカルな観光地は、ひとたび話題になるとキャパシティオーバーしてしまうという弱みがあります。観光人口の増加ペースと受け入れる地域を整備していくペースが合わないのではと懸念しています。地域の合意形成も含めて少しずつキャパシティを上げていくしかないですね。

海津：観光は人が滞在することなので、観光対象だけ

用語解説

SDGs

2015年9月の「国連持続可能な開発サミット」で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された2016年から2030年までの国際目標。人間、

地球、繁栄のための行動計画となっている。

クオリティ・オブ・ライフ

物質的・精神的な豊かさやサービスの量を指し、自分らしい生活

から人生に幸福を見出しているかを測る尺度のこと。

エコツーリズム

サステナブル・ツーリズム
自然や伝統文化が息づく地域（特

に発展途上国）では、観光は重要な外貨獲得や雇用確保手段となる一方、地域固有の自然や文化の枯渇や変容を招く。生態系に配慮した観光という意味で60年代にエコロジカル・ツーリズムが言

ではなく地域全体の産業を含めて育たないといけません。例えば、八戸や肘折温泉などの朝市は最近人気があり、徐々に新しい人が来るようになりました。それに応じて品物の種類も増え、リピーターが増えるという循環ができています。

価値観に共鳴する旅

小倉：イギリスのトットネスという町の近くにダーティントンホールトラストという企業合同が管理する大きな森があります。ダーティントンホールトラストは持続可能な自治体を志向して、教育、劇場、映画館、畑、畜産を備えています。その森の入り口にあるダーティントンホールのホテルは一定期間滞在してトラストの思想や町の人と触れ合ってもらおうという考え方で運営されています。観光客を受け入れるキャパシティは少ないのですが、サステナビリティやスピリチャリティ、ローカルエコノミーをつくっていききたいという観点を持っている人に向けた発信です。ターゲットがはっきりしているので地域の産業設計にも無駄がありません。ここでは観光は結果なんです。

海津：聖地巡礼みたいですね。

小倉：その地に行きたいという動機には、珍しいものを見るというだけではなく、自分のQOLやテーマを高めたり、価値観は合っているけれど違う文化の人と触れ合いたいというものもありますね。

海津：東日本大震災の後、旅のニーズが変化してきたと思います。地域に何か貢献したいと思う人が増え、地域が旅人に提案するものも、若い人を中心に変わってきています。訪れた地域で何ができるか、旅先でどういう生活ができるかという発想で旅をしていますね。

小倉：旅人も成熟してきたのではないのでしょうか。自分の問題意識と旅を合わせ鏡にしてインスピレーションを求めて旅をしている人に会うことがあります。ライフスタイルとしての旅が出てきているのです。

地域の中で広がりを生む観光

海津：観光の「商い」の場は地域内です。人が来てくれて消費してくれる、いながらにして成立する輸出産業です。地域内で経済が循環し、観光によって地域が運営できる方法を地域の人を巻き込んで考えることが必要です。政府はそのような観光地域運営にあたる組織をDMOと呼んで整備しようとしています、その模索は始まったばかりと言えます。

小倉：行政は再現性を求めるきらいがありますが、サステナブル・ツーリズムは再現性を求めるものではないと思います。それぞれの地域で持続可能性について考えていたらそこに共感する人が訪れて、自然発生的に宿ができたりして、ツーリズムができるのが理想的です。地域の中にそういう感性をもっている人が増えるといいですね。

星野：では大規模に人を受け入れないといけない場合はどうしましょう。

小倉：かつての大型観光地に多様性を導入できるのではないのでしょうか。

海津：裏磐梯ではホテルやペンションの宿泊客に、地域のガイドがローカルな旅を提案して地域に入ることを促しています。海外ではコンベンションや国際会議と地方のエコツアーが結びついている例も多いですね。



われ、その概念を自然地域だけでなくあらゆる観光に適用すべきとして2004年WTOがサステナブル・ツーリズム(持続可能な観光)原則を提示した。

トットネス
イギリス南部デボン州にある町。2005年にロブ・ホブキンスが、市民の創意工夫と地域資源の活用によって脱石油社会に移行する草の根運動「トランジションタ

ウン」をはじめた地として有名。

ダーティントンホールトラスト
1932年にエルムハースト夫妻により設立されたトラスト。理想の農村振興をめざし、さまざまなプ

ロジェクトを展開し、芸術家や哲学者を次々と惹きつけた。現在は財産管理人によって運営され、多くのプロジェクトを支援している。

小倉：観光地が窓口になって地域へのエクスカーションを促すのはいいですね。受け入れとしての観光地に滞留させず、そこから地域に分散化させていくというのはポイントかもしれません。

海津：観光地にきた人にとっても多様な選択があるというのは魅力ですね。

地域経済と観光のいい関係

星野：「平成29年版観光白書」（観光庁発行）では持続可能な観光には地域の連携が大事とされています。

海津：囲い込むという発想を崩す動きもあります。ある地域でホテルが宿泊客に「食事は外でどうぞ」と提案したところ、ホテルとレストランが協力し合うようになりました。観光は小さな売上が積み上がるものです。その経済を取り合うのではなく分け合う考えに切り替える必要があります。地域の観光を次のステージに上げるための議論をオープンにしたことで新しいアイデアが生まれたという例があります。議論の輪を開く力は外にも中にもあるのではないのでしょうか。

小倉：事業のフォーカスポイントを売上から利益率に代えると、囲い込みのモデルはいいことがないと気付きます。若い世代は事業のクオリティを維持するために縮小を戦略的に選んでいる人が多いです。人口が減少していく地域のなかで売上と雇用を維持できるかわかりません。自身ですべての要素を持つより地域で強みを持つ人と協力したほうがよい。一方で地域に精神的指導者がいて価値観や思想を言語化して共感を得ることが未来の力になるのではないのでしょうか。

海津：危機感を持っていない観光地はありません。人の価値観も変わっているなか、自分たちも変わらなくちゃ、と思っています。

発酵する地域

海津：環境が変わると酵素の働きも変わります。環境

を変えれば酵素はいい働きをするかもしれないし、腐敗に進むかもしれない。人と人の出会いも同じですね。

小倉：どんな環境でも良くなる可能性を秘めています。酵素は稼働条件が限られていますが、その土地にある酵素をどう活かすかはオーガナイザーの役割です。

海津：地域づくりではよく「ヨソモノ・ワカモノ・バカモノの役割が大切」と言われますが、そこに「いいおんな」を追加したいです。地方にいくと女性の働きが鍵になっていることがあります。例えば漁業って男の世界なのですが、漁業と観光をつなぐ役割をするのが女性だったりするのです。

小倉：情報学とかコミュニティづくりというシステム設計でも「糠床」的発想が大切という対談をしたことがあります。それは発酵していればいい物ができると信じてアウトカムをゆだねるという意味なのです。糠床ってコントロールできないのですが、毎日混ぜているとおいしいものができる。発酵し続けることで予想もつかない面白いことが多様性をもってでてくるはずだ、と信じる。

海津：いい糠床でできたものをおいしいと思う人がいることも大事です。旅も地域も、見続けて評価してくれる人が必要ですね。

小倉：旅人が食べる人として評価していくことですね。

海津ゆりえ（かいづ ゆりえ）

文教大学国際学部教授。農学博士。西表島、小笠原などで日本のエコツーリズムの初期から調査や開発支援に携わってきた。環境省エコツーリズム推進会議幹事会委員、東京都版エコツーリズム検討委員、環境省エコツーリズムアドバイザー等を務める。NPO法人日本エコツーリズム協会理事。著書に『日本エコツアー・ガイドブック』（岩波書店）、『エコツーリズムを学ぶ人のために』（世界思想社）など。

小倉ヒラク（おぐら ひらく）

発酵デザイナー。「見えない発酵菌たちのはたらきを、デザインを通して見えるようにする」ことを目指し、全国の醸造家たちと商品開発や絵本・アニメの制作、ワークショップを開催。東京農業大学で研究生として発酵学を学んだ後、山梨県甲州市に発酵ラボをつくり、日々菌を育てながら微生物の世界を探索。絵本&アニメ「てまえみそのうた」でグッドデザイン賞2014受賞。国内外で発酵文化の伝道師として活動。近著に「発酵文化人類学」（木楽舎）。

用語解説

DMO (Destination Management Organization)
地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役と

して、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人（観光庁の規定）。

エクスカーショ
ガイドの解説を聞きながら地域の自然や歴史、文化の役割などを考え理解を深める参加型見学会のこと。国際会議の際、海外からの参加者が開催地の知識を深め

るために用意することがある。

観光の発展は 私たちの幸福につながるか？

UNWTOによれば、2016年の国際観光客到着数（1泊以上の訪問客）は前年比3.9%増の12億3500万人。今や、観光は世界のGDPの10%を占め、10人に1人が観光関連産業に従事する。

成長率が最も高い社会経済部門の一つである観光が、社会関係性や自然共生、文化育成、健康づくりといった分野にもたらす影響は計り知れず、これが適切に推進されることは地域社会の幸福に大きく貢献する。

一方で、とかく効率を求める現代社会において、観光のための開発が環境破壊につながったり、経済的利益が一部の観光業態（旅行代理店や宿泊施設）のみに集約される傾向も無視できない。

国連は、2017年を「開発のための持続可能な観光の

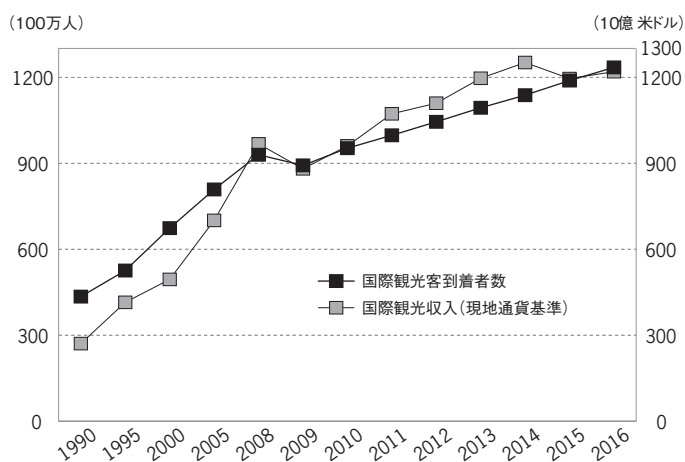
国際年（International Year of Sustainable Tourism for Development）」と定め、観光の役割に対する認識を広めている。「開発途上国の経済成長を支える観光は、貧困撲滅や雇用創出につながります。また、旅先での異文化交流は相互理解を深め、無知や差別といった障壁をなくし、多様性と平和をもたらします。さらに、自然との触れ合いを通じて、資源の有効活用や気候変動などの環境に対する問題意識を高め、地球規模の課題について考える機会を得ることもできます」（国連広報センターのWEBサイトより）

本誌では、国内の地域づくりに資する観光のあり方、都会における観光、地域と都会をつなぐ手法、海外の動向もふまえて、観光がもたらす良い変化を考える。

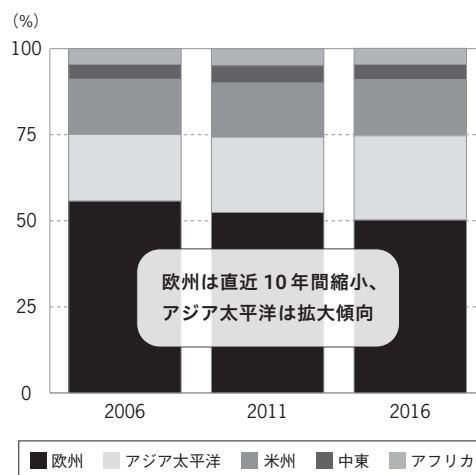
観光がもたらす社会的インパクト

出典：UNWTO Tourism Highlights, 2017 Edition

◎世界のインバウンド観光



◎国際観光客受入数の地域別シェア



◎観光の主要な指標

